

# 読書の四季

学習院高等科と

白樺派の諸先輩

図書主任 飯島裕三

最近高等科生でも白樺派やその機関誌であった「白樺」のことを知る人が少数派になっていっているのではないだろうか。「白樺」という雑誌は明治四十三年（一九一〇）四月に創刊号が出版されるので、今からちょうど一〇〇年ほど前の雑誌ということになります。最終巻は大正十二年（一九二三）八月号で、十三年間に刊行されたのは全部で百六十冊です。

当時中・高等科の生徒の中には、いわゆる学習院的な雰囲気には違和感を持ちその気風に反発する人がいたようで、気の合った者同士で学年や年齢を超えてグループをつくり、今も続く「輔仁会雑誌」に様々な作品を発表していたようです。後年自分たちの独自の発表の場として前述の「白樺」創刊に至

ります。そこから有島武郎・志賀直哉・武者小路実篤・里見弴（さとみとん）・児島喜久雄・柳宗悦（叔父さんは講道館の創設者、加納治五郎です）、木下利玄、長与善郎等、多くの才能あふれる人々が輩出し、その影響は当時の日本人のものの考え方にも大きな影響を与えました。一例を挙げるなら、小説の神様と称えられた志賀直哉の作品は最後のたくさんの作家に影響を与えましたが、ある著名な作家は自身の文学修業は志賀直哉の作品をひたすら原稿用紙に書き写すことであつたと告白しています。

雑誌「白樺」が世に出た頃は、文芸の世界では自然主義文学が全盛を迎えていましたが、白樺派の人々は世の中の風潮に振り回されることなく、「自分は自分」という強烈な個性で安易な妥協を許さず、個性を徹底的に生かした結果としてそれぞれが一流の人と認め

学習院高等科  
図書委員会

会報  
No.101  
発行  
2011.7.20

られていきました。しかし仲間同士では相手を認め合い終生とても仲が良いことでも知られ、こうした付き合いは彼らが若き日に違和感を抱いた学習院の持つ特徴のように思われて興味深いところです。ちなみにロダン・セザンヌ・ゴッホ・ゴーギャンなどの価値をいち早く認め、それを日本に紹介したのも白樺派の人たちでした。

さて今年の鳳櫻祭で高等科図書委員会は、学習院中・高等科が所蔵する白樺派の貴重書を来場者に展覧し、合わせて復刻された雑誌「白樺」の一部をも展示して多くの中・高等科生、そのご父母、一般の入場者の方に白樺派について知ってもらうための企画を練っているところです。そのために白樺派に関係する場所のあちこちに取材に出かけ、その探訪記も発表されるということです。高等科を多くの方に知ってもらえる好機となれば、きつと白樺派の諸先輩も喜んでくれるのではないかと期待するところ大です。



↓白樺派のメンバー（右上：柳兼子。左上：柳宗悦。右下：バーナード・リーチ。中央：武者小路実篤。左下：志賀直哉）  
（白樺文学館HPより）

今回は、今年から新しく図書主任となった飯島先生に一面を飾って頂きました。

さて、今回の『読書の四季』では、鳳櫻祭に白樺派について発表するということで、日本に起こった文学思想の一部を紹介しています。その他様々な記事を用意しましたので、最後までお付き合いいただければ幸いです。

## 書評

今回の書評はスペースの都合上一人のみとなっています。

びくにつくのすすめ

3年B組 島津忠由

高等科一年生の皆さんは一学期も終わり高等科に慣れてきたでしょうか。二年生は夏休みを前に心躍り、三年生は卒業がどんどん近づいています。

さて、そんなみなさんにお勧めする本は、恩田陸『夜のピクニック』です。

「なんだよ」あの中二小説かよ」とか、「もう読んだよ」という声が聞こえてきそうですが、この手垢のついた、紹介されつづいた小説をあえて勧めるわけがあります。それは後で話すとしましょう。

この作品は、読んだことがない人にはもちろん読んでほしいのですが、昔読んで本棚の片隅に置いてある人にももう一度、読んでほしいのです。

読んだことのない人や忘れてしまった人にあらすじを紹介しておきましょう。

主人公甲田貴子の通う学校には夜を徹して八十キロ歩きとおすと、いう伝統行事「歩行祭」があった。高校卒業を間近に、彼女は三年間誰にも言えなかつた秘密を清算するためにひそかな誓いを胸に抱いて歩行祭に参加するのであった。行事の中で、彼らの思い出や夢などが語られるのと並行して、彼女の胸に秘めた秘密が明らかになっていく。永遠の青春小説である。



さて、『ドミノ』や『ネバーランド』など独特な作品を残す恩田作品のなかでも、異色なのがこの作品。こんなにもさわやかな感動的な小説は他に類をみません。高校生のリアルな感情をベースに、心地よくストーリーが進んでいくのです。

主人公の貴子やその友人から語られる思いは私たち高等科生のもれと同じです。

「こんなセリフがありました。もつとちゃんと高校生やつくんだつたな」「損した。青春しとけばよかった」行事という非日常の中で語られる高校生たちの思いは、気恥ずかしく、そこが中二的と言われる所以でもあると思うのですが、それは私たちが心の奥で感じているけれど恥ずかしくて口には出せない思いなのです。

先ほどから、「もう一度読んでほしい」と言ってきました。それは、言い換えれば、「主人公と同じ年になった高校生の今、もう一度読んでください」ということです。自分の将来を見つめなくてはいいでしまふ高校時代。でも、たった三年間だけど、人生において非

常にウエイトの大きい三年間。そんな高校生活を、足元を見つめずに突っ走ってしまうのはもったいない。たまには自分の隣にいる友人と、語り合ってみる。そんな時間の貴重さを、卒業してから気づく前に、この作品で、感じてほしいのです。

クラスが変わって夏休み。その前に、『夜のピクニック』を読んで、高等科生活をもっと楽しむのはどうでしょうか。



『夜のピクニック』 恩田陸 著

新潮社出版

『夜のピクニック』は図書館でも貸し出しています。興味がある方は是非読んでみてください。